

# 悼む 悲しみと生きるため

敗戦から50年後に起きた阪神大震災は、現代人が享受する都市文明のもろさを露呈させた。同時に、人文学者たちは、人間が作り上げた文化を考察する学問の無力感を痛感したはずだ。無念さを抱えながら、学者たちは実践的な研究に乗り出した。

(木須井麻子)

## 人文学の現場から

昨年12月中旬、龍谷大(京都市下京区)で、「臨床宗教師」の研修を受講する大学院生6人が、鍋島直樹教授(55)(真宗宗)を囲んだ。語り合ったのは、同年5月、実習で訪れた東日本大震災の被災地で体験だ。

「追悼巡礼をしていると、沿道の人が手を合わせてくれた。宗教者の役割について考えさせられた」「被災者の傾聴活動で、相手の悲嘆を丸ごと受け止めることは、すごく難しかった」

大学院生は僧侶でもある。研修を通して、死別を体験した人らの心のケアを学び、将来は災害地や病院などでの活動を自指す。困難な課題と向き合う若者たちを前に、鍋島さんは「解決がつかない問題

東北大・龍谷大合同の臨床宗教師研修で、東日本大震災の犠牲者を追悼する学生ら(遺影を抱えているのが鍋島教授。2014年5月、宮城県石巻市で。龍谷大提供)



を抱える相手のそばに居続ける覚悟ができたなら、研修は終わりです」と励ます。

鍋島さんは、J.R神戸線元町駅近くの「真覚寺」(神戸市中央区)の副住職だ。阪神大震災で建物は半壊。市内の門徒2人が家屋の倒壊で亡くなっ

たが、混乱で安否が確認できず、葬儀に駆けつけられなかった。「自分も怖くて、十分動けなかった。無念だった」

計8人の門徒が、被災が原因で亡くなった。諸行無常の光景に打ちのめされ、「悲しみに沈む人たちに、どう寄り

んが中心になって、龍谷大でも、14年度に西日本初の研修を開講。同年度に鶴見大、15年度に高野山大、種智院大が同様の講座を開講する。

仏教や神道、キリスト教など様々な宗教者が取り組んだ用いや傾聴活動から出発。同年4月～14年12月までに計96人が修了した。講座を受講した鍋島さ

臨床宗教師 2012年4月、東北大が、布教や伝道を目的とせず、心のケアを実践する専門家と位置づけ、養成講座を開設した。東日本大震災の被災地で、

添えはいいのか」と真宗宗の文献を改めて読んだ。「泣きたい時は泣いてもいい」「悲しむ心を少し休める」「亡き人は心に生きている」「亡き人の教えを小冊子『死別の悲しみと生きる』にまとめた。自問自答するだけでなく、

添えはいいのか」と真宗宗の文献を改めて読んだ。「泣きたい時は泣いてもいい」「悲しむ心を少し休める」「亡き人は心に生きている」「亡き人の教えを小冊子『死別の悲しみと生きる』にまとめた。自問自答するだけでなく、

## 諸行無常の光景 僧侶として行動

大規模な事故や災害が起きると、行動を起こさずにはいられなくなっていく。2005年のJ.R福知山線の脱線事故で亡くなった学生の遺族に寄せ書きを届け、07年の新潟県中越沖地震では義援金を募った。

そして、2011年の東日本大震災。「今度を支える側になりたい」という思いが、おのずと湧き、発生の約1か月後、被災地へ。仙台市で炊き出しやがれき撤去に加わり、「遺体安置所で、僧侶として手を合わせたい」と申し出た。身元不明の遺体に読経すると、警察官らが駆けつけ、ほっとした表情を見せた。寺院の外であつても、「誰かの心の支えになれた」という。

宮城県南三陸町の避難所では、支援物資と一緒に、『死別の悲しみと生きる』を配布。受け取った被災者の依頼で、津波の犠牲者らの追悼法要を営み、遺族の傾聴活動に取り組んでいる。神戸と東北の往復は23回。鍋島さんは「遺族は深い悲しみの中で、『生き残った者の役割は何か』と悩みながら、生き抜くつもりでいる。彼らを支えるつもりで、逆に教えられる。尊い話を、臨床宗教師を志す学生に伝えたい」と語る。それが、二つの大震災を経た自らの役割だと自覚して。